

研究課題	SDGs 未来都市舞鶴市を通して地方創生を考える。
副題	～ICT で人と人、産学官が繋がる。高校生版政策作り塾～
キーワード	SDGs 地域学習 ICT 活用 教科横断型授業
学校/団体 名	聖ヨゼフ学園 日星高等学校
所在地	〒624-0913 京都府舞鶴市上安久 381 番地
ホームページ	https://www.nisseihs.ed.jp

1. 研究の背景

本校は京都府舞鶴市にあるカトリックの学校である。本校普通科総合コースには就職から大学進学まで幅広い進路を希望する生徒が在籍し、中には中学段階の基礎学力が十分定着していない生徒もいる。また、自己肯定感が低く、学習に対して受け身で、学ぶ意味や楽しさを見失っている生徒も少なくない。これまでは、日常の教科の学習と地域社会の課題が繋がることはなかった。

2018 年より SDGs の「誰一人取り残さない」との考えを取り入れた教育活動の研究を始めた。

2019 年 7 月に舞鶴市が SDGs 未来都市に選ばれ、SDGs の考えをもとに地域について学び、地域貢献できる人材を育てることを産学官が協力してできる土台ができた。ICT を活用し、教科や総合的な探究の時間で学びを地域とつなぐ。こうした取組で生徒の学ぶ姿勢を変化させ、地域貢献によって自己肯定感を高めたいと考える。

2. 研究の目的

①SDGs の考え方をもとに ICT を活用し市役所、地元企業を巻き込んだ「総合的な探究の時間」を計画。取組の中で地域貢献できる生徒を育てることにより、生徒の自己肯定感は向上するのか。

②ICT を活用した教科横断型授業により生徒がより深く学び、学習意欲が向上するのか。

以上 2 点を調査し、学習指導要領にある教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源として地域等の外部の資源を効果的に組み合わせること、教科横断的な視点で教育内容を組織的に配列していくことを目的とした。

3. 研究の経過

地域貢献できる生徒を育てるためには、生徒が地域の「魅力・課題・展望」を理解することが必要である。そこで市役所(政策推進部 企画政策課)、地域の若者による町づくり団体(一般社団法人 KOKIN)に協力していただき、産学官が繋がる「総合的な探究の時間」のカリキュラムを作成した(主なものを表 1 に示す)。当初は 4 月からカリキュラムを準備していたが、コロナ禍による休校によりカリキュラムを短縮し、通常の時間割に戻った 6 月から開始した。

①「高校生版政策づくり塾」(一学期) 地方都市が持つ課題について SDGs の考えを取り入れながら考察する。(二学期) 市役所各課から高校生に問題を提起していただき、その問題解決に向けた考えをまとめる。(三学期) 資料を作成し発表を行う。

②「日星ゼミ※」地域の未来クリエイターを育てるため、フィールドワークを重視した教育活動をする。(※日星ゼミ：KOKIN と共に行う学習プログラム)

③SDGs と ICT を活用した教材の可視化による教科横断型授業を行う。

表 1

時期	取り組み内容	評価のための記録
R2 2 月	・企画委員会にて来年度「総合的な探究の時間」の取組を検討市役所、K O K I N と協議	協議録
3 月	・ICT 推進チーム、1 年学年会で 1 年間のカリキュラムを作成し市役所、K O K I N に協力を要請	
4 月	・職員会議にて 1 年生「総合的な探究の時間」カリキュラムを提示、全職員に対して協力を要請	生徒実態アンケート
5 月	・休校によりカリキュラムの大幅修正 ・市役所企画政策課と zoom による打ち合わせ	
6 月	・「総合的な探究の時間」のプログラム開始 ・理科単元「代謝」で国語・数学との教科横断授業実施 ・理科単元「遺伝」で現代社会との教科横断授業実施 ・視察予定だった杜若高等学校との zoom による会議、教育実践報告を聞く	教員アンケート 生徒振り返りアンケート
8 月	・市役所各課協力のもと市が抱える課題解決にむけて考えをまとめる「高校生版政策づくり塾」開始	「Classi」を使った双方向の課題提起
9 月	・福知山公立大学 杉岡秀紀 准教諭と担当教員打ち合わせ(zoom) 「日星ゼミ」「政策づくり塾」を進めるにあたっての助言を得る。	プレゼン、評価についてのアドバイス
10,11 月	フィールドワーク実施	
12 月	福知山公立大学杉岡秀紀 准教諭による教員向け研修	
1 月	「政策づくり塾」成果発表用資料作成	生徒アンケート
2 月	「政策づくり塾」成果発表会	教員アンケート 生徒自己評価

4. 代表的な実践

(1) ICT を活用した「高校生版、政策づくり塾」

本校の探究活動を進めるにあたって舞鶴市役所に多くの協力をしていただいた。危機管理防災課、生活安全課、スポーツ振興課の 3 課から市が抱える課題を提起していただき、その課題解決に向けて考えをまとめ、発表する「高校生版制作づくり塾」を行った。

二学期「Classi」内のコンテンツであるグループ機能を活用した実践を行った。市役所各課と生徒を SNS で繋ぎ、生徒の疑問や質問をグループ内で問いかけることができるようにした。

これにより適切なアドバイスを得ることができ、生徒たちの探究活動がより深いものとなった。

三学期のプレゼンテーション用ポスター制作において「Metamoji Classroom」を活用しコロナ禍の中、密にならないよう配慮しつつポスター作りを行った。



図 1 Classi による市役所とのやりとり

それぞれのタブレットの中にあるページ(ノート)をグループメンバーで共有することで、ノートが発表用の1枚の模造紙のようになり、実際に机を合わせて書き込み合うように自分の手元でグループ活動のポスター制作を行うことができた。



図2 (一学期)SDGsについて学ぶ (二学期)市役所各課から課題提示 (三学期) 自分ちの考えをまとめプレゼンへ

(2) フィールドワークの中での ICT の活用

日星ゼミではフィールドワークを重視した探究活動を実施。地元の商店街をめぐり地元商店街が抱える問題を考えた。また、商店街や古民家をリノベーションし活用している実践例から、未来の自分たちが街を活性化させるにはどうしたら良いかを考えた。ICT の活用により写真や動画の撮影、資料の共有などを容易に行うことができた。

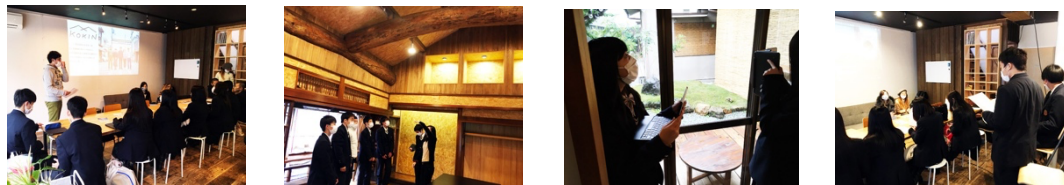


図3 日星ゼミでのフィールドワークの様子

(3) 教科横断コーディネーターと教材の見える化により実現した教科横断型授業

国語総合、現代社会、数学Ⅰ、生物基礎、コミュニケーション英語Ⅰ、家庭科の履修内容について、教科横断コーディネーターを中心に、共通テーマで進められる単元・教材を考えた。

「Metamoji Classroom」の活用により教師は「Metamoji」内にある生徒が持っているすべての教材を共有できる。これにより各教科で生徒が今、何を学んでいるのかを知ることができ、教科横断型の授業が実現した。

これまでのそれぞれ独立した教科での授業に比べ、教科横断型授業は、共通のテーマで各教科の視点に立った捉え方が同時期に行われるため、生徒は多面的な見方・考え方ができ、より深い学びを行うことができた。



図3 生徒の持っている情報を教師が「Metamoji」の中で共有する。

5. 研究の成果

(1) 総合的な探究の時間の成果

市役所、KOKIN の協力のもと行なった1年間の総合的な探究の時間を通して生徒の地域愛が向上し、身近な大人の好意的な関わりを通して生徒の自己肯定感が高まったと考えられる。

SDGs の考え方をもとに、地元舞鶴の魅力について再確認できた。舞鶴を活性化させようと活動している大人と交流することにより、この町を良くするためにどうすれば良いのかを考え、その結果「自分たちにもできることがある」ことに気づいた。また、プレゼンテーション大会を通じて、協力いただいた市役所や企業からフィードバックをしてもらったことで「自らの参加によって社会現象が変えられるかもしれない」と社会に役立つことにやりがいを感じた生徒も多く見受けられた。

アンケート結果、自己評価表を(表2)～(表6)に示す。(2021年1月、2月実施)

表2) SDGs に関して (1年前と比べて)

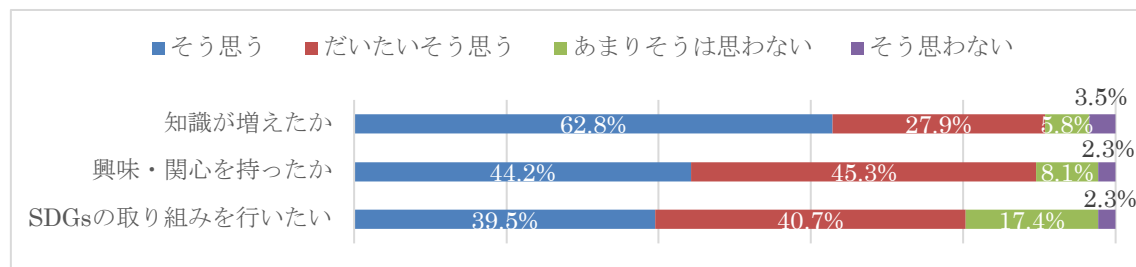
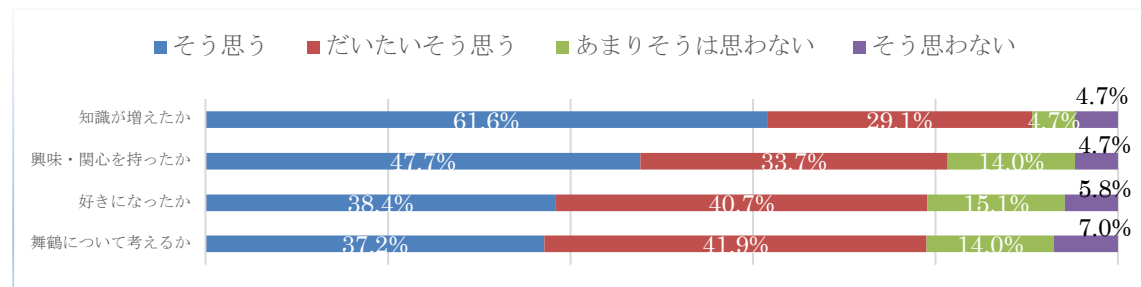


表3) 地元舞鶴に関して (1年前と比べて)



SDGs について多くの生徒が知識を得ることにより興味・関心を持ち舞鶴がよくなるための取組を行いたいと考えていることが分かる。また、舞鶴について新たな知識を得たことにより、舞鶴を愛し地域を活性化させたいという気持ちが生まれていることが分かる。

表4) 「1年間の学習を通して興味を持ったこと、疑問に思ったことは何ですか」

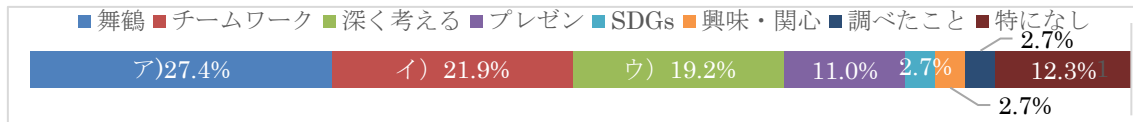


舞鶴に関する記述が一番多く 43%と約半数となった。

〔自由記述〕

ア)「舞鶴のことに興味を持った。ずっと舞鶴にいるけど、知らないことばかりで面白いと思った」「舞鶴市が地方創生のために様々な事に挑戦していることを知らなかったの、知れてよかった」「地域観光開発について少し興味を持ちました。なぜなら自分の故郷が賑やかになるよう願っているからです」等

表5) 「1年間の活動を通じて自分が成長したと思うことについて書きなさい」

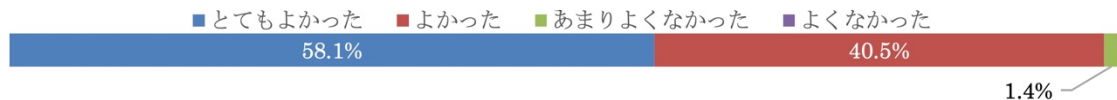


『舞鶴』についての記述が 27%、『チームで1つのものを作り上げていく能力』が 22%、『物事に対して深く考える能力』が 19%となった。

〔自由記述〕

ア)「日常の中で舞鶴について考えられるようになった」「舞鶴を好きになっていい町にしたいと思えるようになった」等、イ)「プレゼンの準備などを通して同じグループの人たちと意見を出し合い、1つのものを完成させたことで、他の人と協力する力が今まで以上になったと思う」等、ウ)「考える力が増えた。1つ1つのことをしっかりと調べようと思うことが増えた」等

表6) プレゼンテーションをしてみてどうだったか



生徒が協力し試行錯誤しながら1つのものを作り上げ発表していく過程で自己肯定感が育ち、「自分たちでも地元の活性化に向けてできることがある」と思えるようになっている。

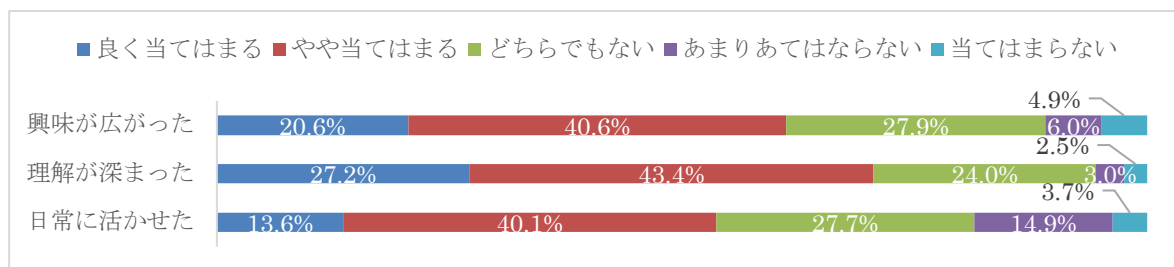
〔自由記述〕

「今回のプレゼンで改めて地元の良いところや直すべきことがどこなのかが分かり、いい機会になった。聞き手を納得させるには色々な前置きや、それに繋がる発表にしていけばいいと分かった。人前に立つことをもっとやって慣れていきたい」、「他のクラスの人がいる中で、話をするこことや、色々な意見を出し合っているプレゼンテーションはとても緊張した。でも、やっている時は本当に楽しかった。プレゼンテーションが終わってみると、改善点はたくさんある。今回のプレゼンで得ることができたと思うことは率先して何かを進める力だ」等

(2) ICTを活用した教科横断型授業の成果

教科横断型授業を行うことにより生徒の興味や理解が深まるだけではなく、学んだことを日常生活で生かそうとする態度が生まれてきた。

表8) 教科横断型授業を行うことにより、どんな変化が生まれたか。



教科横断型授業を行うことにより興味や理解が深まり、半数以上の生徒が学んだ知識を日常で生かせるようになったと思っている。得た知識を活用できることは、学ぶ意味や学ぶ楽しさに繋がり主体的で深い学びができていると言える。

〔自由記述〕

「生物では遺伝子の仕組みなどについて学び、社会では遺伝子における良い面や悪い面を深く学ぶことができたので良かったと思う」「教科をまたぎながら学習することによって、社会としての知識、理科としての知識をつなぎ合わせることができたのでとても良かったです」等

6. 今後の課題・展望

(1) 2年の総合的な探究の時間に繋ぐ

本研究により SDGs の考え方を軸に、行政や地元企業の協力のもと、地域社会の資源や財産を確認し、自ら地域の課題に取り組むことにより生徒の自己肯定感が高まることが分かった。

2年生では多くの地元企業の協力を得て行う「総合的な探究の時間」のカリキュラムを考えている。それは学校、企業の相互利益をもたらすものでないと持続可能ではない。本校キャリア部とともに企業のニーズや地域でも活躍している大人と協働しながら次年度のカリキュラムを作成したい。

(2) 教科横断型授業の充実

教科横断型授業を行うことにより生徒の理解度が向上することは分かった。今回コロナ禍で学校が休校したこともあり、3年間の SDGs を軸とした教科横断型授業の教育プログラムの作成には至らなかった。教科横断コーディネーターを中心として 2022 年の学習指導要領改定に対応した3年間を通した教育プログラムを作成したい。

7. おわりに

本校では4月の緊急事態宣言発令による全国一斉休校に伴い、「マナビヲトメルナ」を合言葉に4月20日から5月22日まで zoom によるオンライン朝礼、課題学習などを行い、休校中でも ICT の活用により生徒と繋がり教育活動を行った。この取組を7月、冊子「つなぐ」にまとめ保護者、近隣の中学高校へ配布した。中学校から研修会の招聘や授業見学などの依頼も受け、ICT 活用推進校としての役割も果たせた。これだけの研究に協力いただいた。舞鶴市役所の皆様、KOKIN の皆様、杉岡秀紀様（福知山公立大学）廣藤宏様（杜若高校高等学校）作間宏介様（シンク・アンド・アクト株式会社）、研究助成により本研究を支えていただいた貴財団に学校関係者一同、心より感謝いたします。



図4 冊子「つなぐ」

8. 参考文献

- ・「人口減少×デザイン」(2015) 笥祐介 英知出版
- ・「学びのイノベーション事業実証研究報告書」(2014) 文部科学省
- ・「算数・数学を活用する力をはぐくむ問題例」(2010) 青森県教育庁学校教育課程小中学校指導グループ